

美ヶ原高原南斜面における観光利用実態

—三城地域での交通量とアンケート調査結果について—

星川 和俊*

はじめに

本研究は長野県の中信高原の中で、その中心的な観光地である美ヶ原高原の南斜面に位置する三城での観光利用実態を把握しようとして、その地域での交通量調査とアンケート調査から観光客の動態について、その結果をとりまとめたものである。

三城と呼ばれる地域は、松本市の中心部から東に約10 km離れた場所に位置している。この地域は、昔から松本市内の小学生の林間学校、市民の休日のハイキング、あるいは美ヶ原高原への登山基地として数多くの人々に知られ、また親しまれてきた。しかし、最近になってこの地域もほかの多くの観光地と同様に、車型社会の影響を直接に受けようとしている。つまり、霧ヶ峰ビーナスラインの開通(昭和43年)、同和田峠—扇峠間開通(昭和51年)、同美ヶ原線開通(昭和56年)等によって、この地域でもこれらの山岳観光道路への取り付け道路が整備されてきた。特に、三城地域では美ヶ原線の開通によって、既存の扇峠—松本市街地間を結ぶ林道等が整備され、この数年の間に急激な変化が起こりつつある。これらの結果、車利用の観光客が一挙に増加することも予想される。

また、松本市では三城を中心とした東山観光開発を計画しており、既にその計画に沿って幾つかの施設が昭和58年から建築されてきている。例えば、その計画では、“三城いこの広場”と呼ばれる20haの敷地の中に、センターハウス(レストラン等)、人工芝スキー場、オートキャンプ場等の5つの施設を、松本勤労者野外活動施設として整備しようとするものである。

このように、かつては放牧場や美ヶ原高原への登山の玄関口であった三城地域は、これを取り巻く周辺域の変化と観光に対する社会のニーズの変化の中で、その変貌期を迎えている。そこで、後述する2, 3の現地調査から本地域での観光利用実態の一端を解明しようとして試みた。なお、ここで行なわれた調査は、夏季の期間におけるわずか2日間の結果であり、三城での観光実態の全体像を明確にするには、更に多くの調査が必要であることはいまでもない。しかしながら、この2日間の調査結果を整理した時、おぼろげながらではあるが観光という観点から見た三城の一つのイメージが描けたと考え、ここではこの実態調査のデータを中心に報告する。

本研究の目的

三城はFIG. 1に示すように松本市の東方に位置し、美ヶ原高原の南斜面に抱かれるような地形をした地域である。この地域の調査は、田中、土田、星川らによって地質、地形、水文、あるいは植物、動物学的な検討が行なわれてきている。しかし、ここでの観光の利用実態に関する調査はほとんど見当たらない。ただ美ヶ原高原への観光客の利用数に関して、地元の市町村による統計的推定が行なわれているに過ぎない。このため、三城地域における従来の観光の利用実態を定量的に把握することは困難である。

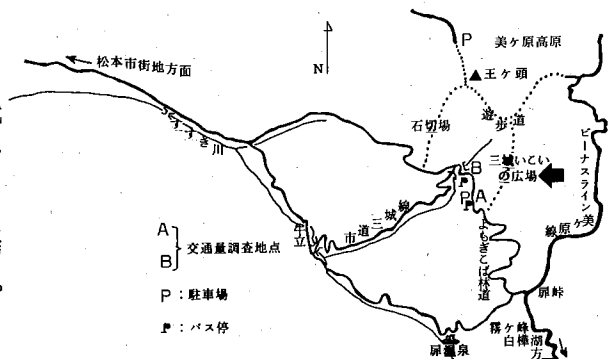


FIG. 1. 三城周辺域概念図

そこで、この調査を行なうに当たって、現地調査の目的を次の二つに絞った。つまり、A) 三城を取り巻く地域での交通の流れの実態把握、B) 三城に來訪する観光客の利用実態と彼らが抱く“三城という地域のイメージ”を明確にすることである。A) の調査は、この地域が美ヶ原高原の付随的な小規模観光地として立地する状況をつかみたいと考え、これらの大規模観光地と付随的観光地の関係について、その分析を狙ったものである。このため、三城地点での交通量調査を実施した。また、B) の調査ではどのような人々がこの三城地域に來ているのか、この地域に何を求めて來ているのか、あるいは彼らがこの地域に関してどのような印象を持ったか、等の観光客の実態と彼らの抱くこの地域に対するイメージを調べることを目的とした。本調査は、事前に作成したアンケート票に基づき、面接方式によって行なったものである。

*信州大学教養部 Fac. Lib. Arts, Shinshu Univ.